

時を重ねて未来を創る

旭川大学 経済学部長 江口 尚文

「時は流れる」。旭川大学が開学して50年経った。川の流れのメタファーなら、旭川大学の源流は50年前にある。私が本学に合流したのは開学30年目の頃である。ゆえにその上流を知る由もない。わずかに、先達たちが物語ることや、残る書き物から過去の流れを知るのみである。察するに相当な激流だったようだ。深刻な経営危機に陥った時期もあったという。その頃の様子は山内学長が詳しい。ここでは、私が想起できる範囲で語りたい。

赴任当時の本学は経済学部だけの単科大学であった。だが、今の倍以上の1学年250人を越える学生数で、本州出身者も多かった。休み時間に限らず、常に北辰会館や中庭の芝生は学生たちで賑わっていた。普通に大人数200名の講義を短大251教室で行う。夜間の生涯学習クラスでは、意欲ある年上の社会人を相手に議論する。会社経営者などもいて、各自が職務経験に誇りを持っており、駆け出しの私は圧倒されることもしばしばであった。

部活動も盛んで、アメフトや剣道など体育会の学生がキャンパスでふざけ合い、ホットロードは駐車場に自慢のバイクを並べた。茶道部は茶会の前売券を売りつけ、近代文化研究会は現代を憂いた。北辰祭では体育会が稚内から聖火リレーを行い、士別付近でおだった学生が素裸で走って、警察へ連行されるという珍事もあった。警察官は本学出身という落ちである。卒業式ではラグビー部が志村けんのバカ殿や白鳥レオタードの姿で壇上に上がり笑いを誘った。

教授会は長かった。熱い議論が戦わされ、最年少の私は個性ある先生方の遣り合いを、時に感心して、時に笑いを堪えて聞き、また時に意見して睨まれた。皆が持論を展開する侃諤の教授会だった。日常では、研究肌の先生が論文執筆の圧を掛け、地域研究所の先生が依頼研究を投げ掛けた。そういう方々が退職され、特定の議題は評議会に移り、今の教授会は静かで何か物足りない。不謹慎だが、かつてのカオスを懐かしむ私がいる。

「時は流れない、それは積み重なる」(岩波現代文庫『物語の哲学』第六章)。果たして時は流れ去るのだろうか。これまで本学で多くの学生が学んだ。多くの教職員が学生たちと時を共にした。そして卒業し、あるいは退職していった。その意味で皆ある時、本学を通過点にして去っている。ただし、流れ去って無になるのではない。織り成した物語は残り、その上に今がある。いわば、時は積み重なり今を創っている。

赴任してほどなく、経済学部の入学定員は250人から200人、そして150人へ、さらに保健福祉学部の創設時2008年に100人へと減じられた。生涯学習クラスは2016年に閉講した。経済学部の規模縮小が続く。それに伴い男子学生の絶対数が減り、体育会系の部活動は低迷して、多くが休眠状態に

追い込まれる。時とともに旭川大学は様変わりした。私も最年少から中堅へ、そして今やロートルの域へ移行した。過去は想起の中で甦る。

昔は良かったなどと言う気は更々ない。今や小規模なのが経済学部の強みだ。機動性に富む少人数ゼミは地域活性化を志向し、地域に頼られる存在になった。学生は得がたい実践力を身に付けている。学生の顔がよく見える。充実した支援で、就職決定率は直近の3年連続100%である。経済学部の縮小は新学部創設のイノベーションも誘発した。「地域を拓く」という建学の理念へより近づいたと思う。全て過去の積み重ねがあるからだ。

50年の歴史の上に、今の旭川大学がある。その今が未来を創る。先日、地域の実務家の方々10人をアドバイザーとして呼び、ゼミナール活動報告会を開催した。今年で9年目である。コロナ禍の制約下、各ゼミは苦心してフィールドワークを行い、その成果を報告した。アドバイザーの方々には、年々質が高まっているとの嬉しい評価をいただいた。こうした地道な「時」の積み重ねが、旭川大学の優れた未来を創ると信じている。